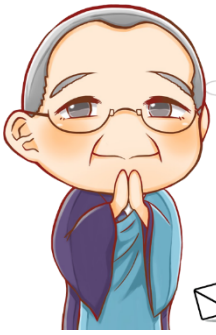
華岳山恩林寺発行

頭陀袋 143

令和６年５月号

写真：鑑真大和上像　唐招提寺蔵



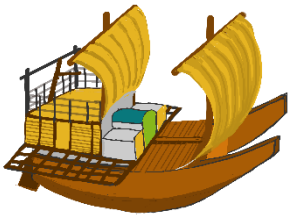
お寺へ行こう 和尚さんと友だちになろう

中山かんのん 華岳山 恩林寺
中山中学校下
〒506-0052 岐阜県高山市下岡本町2779
kagakuzan@onrinji.com ☎(0577)34-1245
https://onrinji.com/

美濃（岐阜県）の名僧栄叡大師について

時は奈良時代、聖武天皇の時代にさかのぼります。天皇は深く仏教に帰依し国を安定するためには仏教の教えを守り教理に基づいた政治を行おうと努めました。わけても平城京には法隆寺、興福寺、薬師寺などのお寺を建て僧侶を育成しました。

しかし、本来の目的に沿わない僧侶や自身の名誉や生活の安定のために勝手に髪を剃り僧侶を名乗る者が出てくるようになりました。これでは律令国家が成り立ちません。天皇は興福寺の**栄叡**（ようえい）、大安寺の**普照**（ふしょう）に命じ唐の国より戒師を招聘するよう命じました。



勅命を受けた栄叡と普照は遣唐使船で唐の国へ出かけることとなります。この時代季節風や航海術を熟知したものは少なく命がけで渡航を果たした二人は長安や洛陽で研鑽を積み九年の歳月を経て、鑑真和上（がんじんわじょう）にあうことができました。二人は日本の現状、戒師の必要性を説き日本に渡る戒師を推薦してくれるように依頼します。しかし誰も危険を覚悟で日本に行くという者はいませんでした。

そこで鑑真和上は自らの渡航を決意しますと、二十名余りの弟子たちが同行を申し出ます。しかし、この計画を謀議するものも出てきて嘘の密告をされたことにより二人は投獄されてしまいました。こうして一回目の計画は頓挫してしまいます。その後、密かに準備を続けますが沿岸部での

トラブルなどによりついに五回目の渡航で暴風雨にあい、海南島へ漂流してしまいました。この頃から栄叡の体調が崩れ始めついに端州（たんしゅう）龍興寺において亡くなります。栄叡四十歳ころといわれています。鑑真和上を日本に招聘するという任務途中での死去は本人にとってはどんなにか残念であったことでしょう。

この頃、和上は失明してしまいます。こうした事件にあいながらも今度は日本から来た遣唐使、藤原清河らの帰国船に同乗することができ、ついに六度目の挑戦が実を結んだのでした。　和上は東大寺にのぼり戒壇院を開き、聖武天皇をはじめとするたくさんの人に戒を与え仏弟子としての心得を示しました。その後、唐招提寺を建立し、日本仏教の礎を示しました。和上は、建築、絵画、医学、行政、司法などにも通じており、大きな功績を残しました。

東大寺戒壇院

唐招提寺

平成四年日中友好文化協会の支援により、栄叡大師を里帰りさせたい。という話が進み「栄叡大師千二百五十年」にあたり中国側より四体の尊像が贈られ岐阜県伊深、正眼寺。奈良、興福寺。唐招提寺、岐阜市真福寺に納められました。栄叡大師は長い年月を経て鑑真和上との再会が実現できたのでした。

鑑真大和上

14歳で出家、洛陽・長安で修行を積みました。渡日後10年間のうち5年を東大寺で、残りの5年を唐招提寺で過ごされ、天皇を始めとする多くの人々に授戒をされました。「東征伝絵巻（とうせいでんえまき）」に渡航の様子が描かれています。

高山市丹生川町正宗寺東堂
原田道一老師のご遷化（せんげ）

老師様は永年僧職にあって、博学、行動派、幅広い活動家でありました。また仏教詩人、坂村真民、あいだみつお、との交流がありまた、あらゆる方面に人脈があり、禅の布教のためならインド、アメリカに出かけたり、良寛さんに会いたいと良寛さんの里を訪ねたり、さらには鎌倉では円覚寺で座禅をされるなど、たいへんなご活躍でした。

私どもの寺報（頭陀袋）が仏具屋さんの店頭でお目に留まったのがきっかけで随分とお世話になりました。また（座禅の会）朴の会にも参加させていただき、よい仲間を紹介いただきました。

「暖かくなったら岩手のお寺に行きたいなあ。」との約束は果たせませんでした。三月二十日昼、自坊では涅槃会が勤まる時間、ロマンチスト原田老師は眠るようにご遷化されたと伺いました。

大夜（たいや）（お通夜）津送（しんそう）（本葬）は荘厳厳粛に営まれ、ご法縁を頂戴いたしました。

住職九拝

大貴山　正宗寺

永平七十五世、山田霊林禅師は、この寺で出家、得度されました。禅師の本師、都築霊源和尚は裏山一帯を景勝地とし、釈迦大仏納骨所造立、また境内に四季の花を植えることに尽力され、五月末から六月にかけて開花する勺薬（しゃくやくじ）寺として、なお遠近に知られています。

華岳山 恩林寺
住職 古田 正彦
新堂 小森 鳳雅

【第三章 二節】自心と問答

睡魔との戦を坐禅と言う也。そんな迷言が誕生する坐禅の時間。鳥のさえずりや優しい風の音が子守唄のように聞こえてきます。気付くと先輩が鬼の形相で目の前に立っており、警策を振り下ろします。1回で覚醒できれば良いのですが、私は3回ほど打たれます。どうしても眠気に勝てる気がしなくて、同夏(どうげ)の前で大泣きしたことも

ありました。しかし、毎日繰り返すうちに自然と叩かれる事も少なくなりました。

坐禅の後は「公案(こうあん)」という禅問答となります。個々人で個室に呼ばれ、師家(しか)(師匠)から質問を出されます。例えば両手で叩いた時、左右どちらの手から鳴っているか？

生まれる前の自分の姿を表現せよ。等の訳が分からない質問ばかりされ、それに答えを導き出さなければなりません。一人で見つけ出す答えのはずが、「分からん！助けて！」と頼る同夏もいたほど難しいものです。なぞなぞのようで楽しい反面、難しすぎて理解できない時もありました。

正しい答えがでるまで、何度も部屋から追い出されます。そのため1ヶ月以上の時間を要したこともありました。同夏から正解者が出るとヒント等を聞きたくなります。それを見通されていたのか、各々異なる禅問答が出され頭を抱え込まされました。

その分、正答を導き出した時の嬉しさは言葉では表現しきれません。同夏同士で喜び合うこともありました。